

「元朝秘史」ボルテ奪還作戦の真相

安田公男

1. 前書

チンギス・カンこと本名テムジンは9歳で父をなくすが無事成長し、18歳の時に父の決めていたボルテと結婚する。間もなくメルキト人の集団に襲われ、新婚間もない妻と異母弟ベルグテイの母親を奪われる。元朝秘史（秘史と略）には、その救出のためにケレイト部族のカンであるトオリル、友人ジャムカと大軍でメルキト領に攻め込んで妻を無事取り戻したとあり、その劇的な内容でよく知られている。だが、集史では戦いについては述べておらず、トオリル・カンの政治力で取り戻したようになっている。他の史書、元史、元聖武親征録にはこの事件の記事がない。誘拐事件そのものは二書に記述があるので事実と思われるが、人質救出に武力を用いることは考えられず、集史のようにトオリル・カンの政治力により取り戻したのが真相と見なされている。この話の後半部分には、明らかに20数年も後のメルキト併呑時の内容も含まれており、虚構部分である。それでは、三隊が集結する前半部分はどう理解すれば良いのだろうか。何らかの出来事の反映なのだろうか。著作では触れなかった部分を考えてみたい。

2. 秘史によるボルテ救出の経緯

先ず、この事件を記している秘史94節から115節の要点をまとめる。

2.1 結婚

- a. ボウルチュと僚友になった。
- b. 18歳になり、ボルテを妻に迎えた。
- c. ケルレン河の源であるブルギ河岸に移った。
- d. ボルテの父から引き出物としてもらった黒貂の裘をケレイトのトオリル・カンに贈り、部民の取り返しを依頼した。
- e. ブルカン岳からウリヤンカ族のジャルチュウダイ翁がやって来て、ジェルメという息子を置いて帰った。
- f. 亡き父イエスゲイが、メルキト人から母親ホエルンを奪ったことへの復讐だとしてメルキト人の一隊が襲ってきた。妻ボルテと異母弟ベルグテイの母が奪われた。

2.2 救出作戦

- a. テムジンは弟と共にトオリル・カンの元に行ってボルテの奪還を依頼した。
- b. トオリルは言った。「去年、黒貂の裘を貰ったとき、散り散りになったお前の部民を集めてやると約束した。私は二万の兵を出す。ゴルゴナク河原にいるジャムカにも二万の兵を出すようにお前から伝言せよ。集合日はジャムカが決めるように」
- c. これをジャムカに伝えると、彼はこう言った。「(メルキトのカン) トクトアはラクダが原に居る。ダイ・ウスンは、オルコン、セレンゲの河の間のタルクン島にいる。カアタイ・ダルマラはカラジが原に居る。キルコ河を筏で渡りトクトアを襲おう」、「トオリル・カンはブルカン山の南をテムジンの居所を

過ぎて来るだろうから、オノン河の源のボトカン・ボオルジで会おう。わしの民1万とテムジンの民一万と併せて会おう」

- d. ジャムカの言葉をトオリル・カンに告げると、二万の兵で出動し、ブルカン岳の南のブルギ河岸を目指した。ブルギ河岸にいたテムジンはトオリル・カンの道を空けるために移動してトンゲリク河を遡り、ブルカン岳の南のタナ河に駐営した。そこから移動して、トオリルとその弟のジャア・カンボ、併せて二万の兵がキムルカ小河のアイル・カラガナ（カラガナ集落）に駐営しているところに合流した。
- f. テムジン、トオリル、ジャア・ガンボが、ボトカン・ボオルジに着くと3日前にジャムカは到着していた。期日に遅れた代償として、作戦の指揮をジャムカに委ねた。
- g. キルコ河に到着し、河を渡ってメルキト部衆を打ち破り、トクトアとダイル・ウスンをバルグジンの地に追いやった。
- h. 逃げて行くメルキト部衆の中にボルテを見いだして救出した。
- i. このようなことになった原因は、イエスゲイがトクトアの弟チレドゥから母ホエルンを奪ったことにある。その仕返しに、メルキトの三百人の兵がテムジンを襲ったが捕まえられなかったので、その妻ボルテをさらい、チレドゥの弟のチルゲル・ボコに世話をさせた。
- j. ベルグテイは母を探そうとしたが、母は、「わが子らが王者になったと言われましたが、ここで悪しき人
に心迷うた今、どうして己が子の顔を見られましょう」と言って森に逃げ込んだ。
- k. 三人はメルキトの政治堂を打ち壊し、貴婦人等を捕らえ、オルコン、セレンゲの二河の間のタルクン出島から退いた。ジャムカとテムジンはゴルゴナク河原を目指して帰路についた。
- l. トオリルはブルカン岳の北から。ホコルトゥの森を経て、カチャウラトゥ、スプチド、フリヤストゥ・スプチドを過ぎ、巻き狩りしながらトーラ河の黒林を目指して帰った。

3. 疑問点とその解釈

この戦いは虚構である、と考えざるを得ない点がいくつかある。その理由は重要なので、著作でも述べたが再度述べる。

① 人質救出に大軍を用いることはできない

大軍で押し寄せても、人質の首に刃物を突きつけられて前線に出てこられたら退かざるを得ず、選べない手段である。金品で購うか人質交換などによるのが、古今東西の解決方法である。戦乱の中でテムジンとボルテがたまたま再会したというのもありえない。大事な人質をメルキトが自由にする訳がないからである。ケレイトのカンであったトオリルに依頼して、その政治力で取り戻したという集史の記述が正しいと考えられる。

② メルキト領に討ち入った状況描写に後年の戦いの内容が含まれている

2.3 の j. で、テムジンの異母弟ベルグテイの母が、「わが子らが王者になった」と言って身を隠したとあるが、この時点でテムジンは20歳前後と推定され、王者どころか従う民もない。大軍でメルキト領に討ち入ったのは遙か後年、テムジンがチンギス・カンに即位する前年の1205年冬である。この時点ならばベルグテイの母の言葉は妥当である。さらわれて間がない時点なら、母は息子の元に帰るだろう。帰ろうとしないのは、相当な時の流れがあったからである。又、トクトアがバルグジンに逃げたとあるのは、1198年頃にトオリル・カンが単独で行ったメルキト侵攻作戦の時のことである。1205年のトクトアは前年にナイマン部族のタヤン・カンと共に戦って敗れており、この時は領地から逃げだして、ブイルク・カンのナイマン陣営に助けを求めに行った。このように、2.3のg.からk.までには、後

年のいくつかの作戦の内容がはめ込まれている。

③ ケレイト部族のカンが、モンゴル部族の内政に口出しするはずがない

テムジンが部民の取り返しを依頼するとしたら自部族のカンにするはずで、他部族のカンにするはずがない。ところが史書には、クトラ死後から 30 年近くモンゴル部族にカンの名がないので、ケレイト部族のカンに依頼したことはあまり疑問に思われていないようである。しかし、これではモンゴル部族が独立しているとは言えず、ケレイトに隷属している。しかし後年、西域から帰ってきたトオリルをテムジンが保護している行動などを思うと、互いに独立していることは明らかである。この当時のモンゴル部族にも、カンがいたのではなかろうか。

④ 消されたモンゴル部族のカン

モンゴル部族のカンは、初代カブル（チンギス・カンの曾祖父）、二代目アンバカイ（タイチュウト氏族の祖）と続いた。その後、クトラ（チンギス・カンの祖父の弟）が三代目カンとなりタタル部族と戦った。彼が死亡した記事はなく、短期間ではあるがテムジンの父のイエスゲイの活躍が記録されている。その時クトラは亡くなっていたのだろう。イエスゲイが亡くなったのはテムジン 9 歳だから、その前 2 年間で彼の活躍期間と仮定すれば、クトラはテムジン 7 歳頃に亡くなったことになる。チンギス・カンの生年を元史の 1162 年とすると、クトラ死亡年は 1168 年になる。それから、モンゴル部族のカンの名が記録されるのは 1206 年のチンギス・カンまで待たねばならない。テムジンもチンギス・カンになる前に、モンゴル部族だけのカンになっていたのは明らかであるが、その記録がない。だが、1196 年のウルジャ河の戦いの直前に宴を催していたことが全ての史書に記録されているので、これがカンに就任した祝宴だったと考えられる。テムジンがカンであった期間を除いても、30 年近い期間、カン不在ということになる。三代続いた後にカンが居なかったとすれば、部族として崩壊したと見なさざるを得ないが、後年のテムジンとケレイトの関係を見ると、両部族は対等に付き合っている。であれば、カン死後の新しいカン選出期間を除いて（モンゴル部族はカン選挙制だった）、ずっとカンは居たはずである。その目で史書を見れば、アダル・カン（集史）とジョチ・カン（集史、元聖武親征録）という二人が史書にある。わずかな記事から推測すると、イエスゲイの死の直後にタイチュウト氏族のアダル（アンバカイの長男で、タルグタイの父）がカンとなった。テムジン成人期頃のカンはまだアダルだったと思われるが、その後間もなくカン位はキヤト氏族のジョチに移ったと思われる。即ち、モンゴル部族のカンは、クトラからアダル、ジョチ、テムジンと続いたと考えるべきである。ジョチはクトラの息子であるから、テムジンの父イエスゲイの従兄弟である。テムジンの一族であるこの人に、部民の取り返しを依頼したのに違いない。従って、秘史のこの項のトオリル・カンはジョチ・カンと読み替えなければならない。ジャア・ガンボは関係が無い。このようにカンは居たが、アダルは若きテムジンをいじめたタルグタイの父であり、ジョチの弟アルタンはチンギス・カンになる直前のテムジンを裏切った。このような理由で二人とも史書から消されたのだろう。消しきれなかった一部の記録が残ったと思われる。

⑤ 誰がボルテ返還交渉をしたのか

ジョチ・カンはいたが、ボルテの奪還についてメルキトと交渉したのは集史のようにトオリル・カンであろう。ケレイトとメルキトは交通に問題の無い平原で領土が直接に接しており、対立はしていたが、政治的にも、そして恐らく経済的にも関係が深かったと思われるからである。モンゴルとメルキト間にも直接の交通路はあるが、オノン河の上流から山地を縫って行く長く狭い道であり、深い付き合いがあったとは思えない。辺境地方での接触はあったが、敵対的であった。そこでジョチが、この事件に中立的な立場のトオリルに返還交渉を依頼したのだろう。どういう交渉をしたのかは不明だが、ボルテはケレイト経由で無事にテムジンに返還された。その途上で産まれた男の子をテムジンはジョチと名付けた。

ジョチ・カンの恩を忘れないために、名を貰ったと考えられる。

4. 地名の考察

分かるのはケルレン河（現ヘルレン河）、オノン河、ゴルゴナク河（現ホルホ河）、ブルカン岳（ヘンティー・ハン山）、ケルレン河のブルギ河岸（ムングンモリット付近を中心とするヘルレン河流域）、キムルカ小河（エグ町の南を東西に流れる川）である。ジャムカの根拠地は、ホルホ河岸の 48.18N110.31E 付近である。カラ・トン（黒林）はケレイト部族の中心地だから、この項に関係がない。

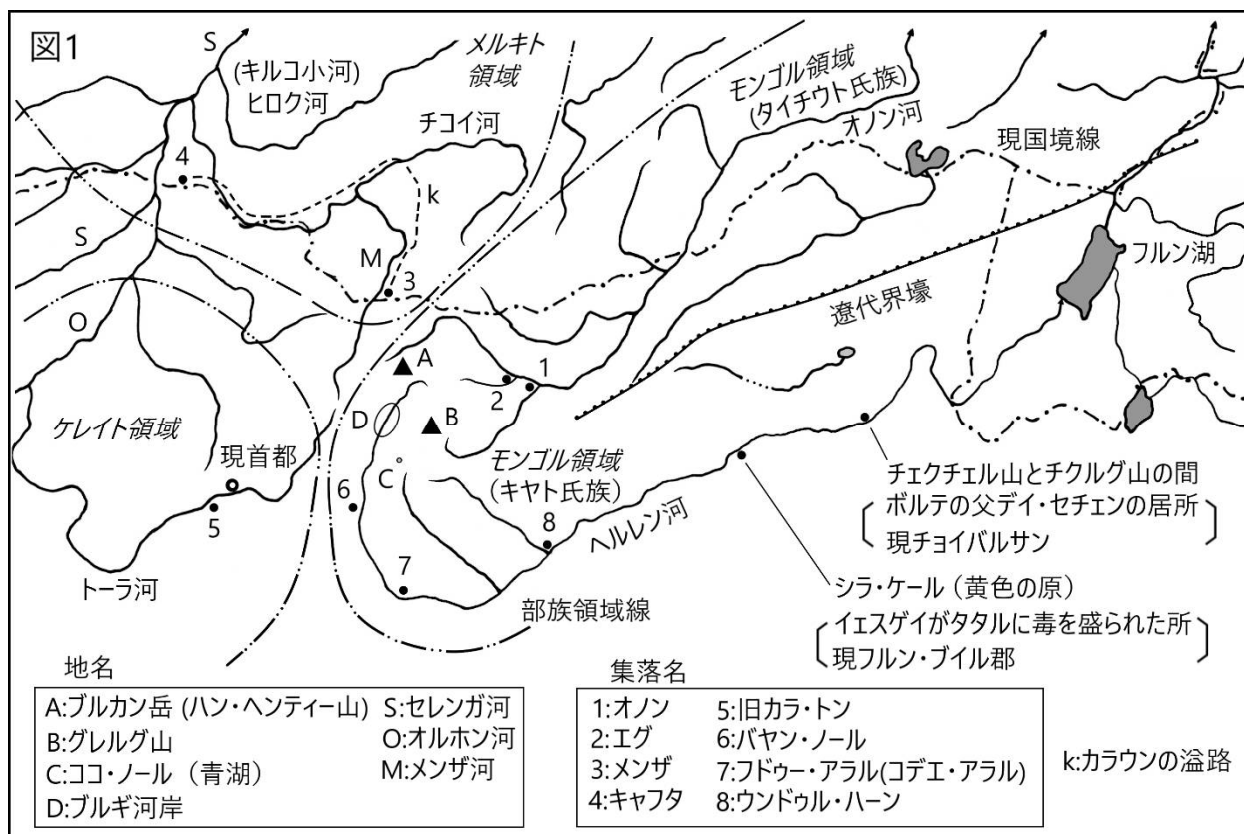
カラウンの隘（はざま）路はこの項に言及されていないが、モンゴル部族とメルキト部族の交通を考える場合に重要なので述べておく。

◇カラウンの隘（はざま）路

現オノンの町からオノン河に沿って上流に向かい、途中から現ロシアとの国境線に沿って西に進むとメンザ河に至る。現在メンザ、ウキルの集落がある。河に沿って北上し、タキトゥイ(49.74N109.13E)付近で少し東にそって更に北に進む。50.13N109.23E 付近で北西に向かい、チコイ河西岸のバラホエボの集落辺りに入る。河添いに西南に下って行くと、メルキト部族の中心地である現キャフタの東に入る。

この道はヘンティー山脈の北に繋がる山中の曲がりくねった狭い道である。平地が少なく多くの牛馬を養えないから主要交通路ではない。テムジンの母ホエルンが最初の夫であるチレドゥと共にメルキトへ帰ろうとしていた道であり、又、ケレイトのカンであったトオリルが叔父に追われてメルキトに逃げ込み、この道を通してイエスゲイの元にたどり着いたことで知られる。

当時の勢力関係と地理状況を次図に示す。



① ブルギ河岸

テムジンは9歳で父を喪った後、12歳くらいからケレイト部族のトオリル・カンの保護下で育った。数え15歳で成人となり、モンゴル部族に帰った。その場所は現エグ町付近である。だが、タイチウト氏族のタルグタイの嫌がらせを受けて、条件の悪い山間のココ・ノール(青湖)、48.02N108.95E付近に逃げた。数え年18歳となってボルテと結婚した。生年を元史の1162年とすると、1179年結婚となる。季節は今の夏頃であろう。それから移ったのがブルギ河岸であった。恐らくボルテの父から結婚の引き出物として多くの家畜を貰ったので、平地に移ったのだろう。ここを選んだのは、結婚前に友達になっていたボウルチュが住んでいたからと考えられる。彼の父の名はナクウ・バヤン(ナクウの富者)と言った。恐らく現在のムンゲンモリット町(48.21N108.48E)辺りの有力者だったのだろう。良い土地には先住者がいるので、少し離れた土地で暮らしたはずである。移って直ぐにジョチ・カンに部民の取り戻しを依頼したのだろう。

② 襲われた時期

時期はボルテが第1子ジョチを妊娠して直ぐの頃である。2.2b.でジョチ・カンが去年と言っているので、事件が起きたのは結婚年の冬が明けた頃、即ち1170年の春から夏頃であろう。

③ ジャムカ居所

拙著で解明したが、彼の遊牧域であるゴルゴナク河原は、48.18N110.31Eを中心とする、現ホルホ河流域と推測される。

④ テムジンとジョチ・カンの進軍経路

現エグ町の側を東西に流れるのがキムルカ小河である。ブルギ河岸から直行できる道は現代の地図に示されていない。一旦南に下って、ホルホ河添いに進んだとすれば途中からジャムカと一緒にいるはずであるが、そうは書かれていない。ジョチ・カンはブルギ河岸に立ち寄っているが、ブルギ河岸より北で人口の多い所はないので、南からやって来ている。又南へ引き返すとは考えにくく、直接東へ向った

と考えられる。通行できる水系を探すと一つだけ見つかった。GPS 座標 48.29N108.73E で東からヘルレン河に流入している川があり、これがトンゲリク川であろう。現在テヌー川と言うようである^[2]。これを遡り、その上流部の 48.44N109.32E 付近で少しだけ南東に向かい、別の水系の最上流部付近に移る。東北東に向かうこの河をバルフ河と言うようである。著作ではジルガラントゥ河としていたが、この河とホルホ河との間の河がジルガラントゥ河のようである^[2]。バルフ河に沿って進むが、通行痕は薄い。現タリフイン・スム (Tarihuin Sume、48.46N109.68E) という場所を東に越えると通行痕はハッキリしてきて、48.59N110.86E 付近からキムルカ小河方面に向かう道筋がたどれる。想定できる経路はこれ以外に無い。駐留していたというタナ小河はトンゲリク河の 48.33N109.05E 地点で南から流入している川と思われる。このように推定するが、距離はムンゲンモリットからエグ町まで、ざっと 160km となる。騎馬での移動速度を 70km/d とするなら 3 日、牛車での移動を 25km/d とすれば 7 日、ヒツジ、ヤギなどを連れての移動を 10km/d とすれば 20 日前後要する。このように移動路を推定するが、現在でも通行痕がハッキリしないところがあるから、当時も頻繁に使われていた道だったとは思えない。

⑤ ジョチ・カンの居所

ジョチ・カンがヘルレン河添いに北上して来てブルギ河岸を経ている。居所の候補としては、現在のバガヌール (Baganuur、47.78N109.05E) 付近、あるいはもっと南のコーデエ・アラル (Ködö Aral、47.00N108.90E) 付近が想定できる。ただし、テムジンとの事前打ち合わせの為に、もう少し遠い地点からやって来たと考えられないこともないが、その場合の想定は難しい。カンなので、居住条件が良く、交通にも便利な所にいたことは間違いない。

⑥ ウリャンカ族の役目

一連のこの記事の中に、ウリャンカ族のジャルチュウダイがジェルメという息子を持ってきてテムジンに与えたという話 (97 節) が一節だけ挟まっている。単に時系列的にこうだったと考えるよりも、彼らがこの事件で果たした重要な役目があったので、ここに挿入されたと判断すべきではなかろうか。であれば、狩猟や鍛冶を生業としていた山岳居住民のウリャンカ族なので、トンゲリク河からオノン河上流に向かう路を良く知っていたのだろう。彼らが道案内をした功績は大きかったので、ここに取り上げられているのではなかろうか。

⑦ アイル・カラガナとボトカン・ボウルジ

カラガナ集落はキムルカ小河近くにあったというから、これは現エグ町の位置と推定できる。ボトカン・ボウルジはそこから遠くないところで、オノン河を遡った所にあるはずである。そう見ていくと、エグ町のほぼ真北のオノン河添いに、ハシンギイン・ドゥガン (Hashingiin Dugang、48.91N110.15E) という場所があった。エグからの距離 25 km で、牛車で丸 1 日の移動距離である。集落らしいものではなく、ただの平地である。モンゴルの地図を見ると、地名はあるが集落がない所がかなりある。ほとんどが平地で河の近くにある。恐らく夏季の放牧場として牧民がよく集まる場所と思われる。ここが、ボトカン・ボウルジと推定する。

⑧ 三軍の向かった先

さて、ボトカン・ボウルジに集結してから向かう方向は当然メルキト方面である。オノン河を遡り、カラウンの隘路に向かう入り口とも言うべき、メンザ河に向かったのに違いない。

⑨ ジョチ・カンの帰路

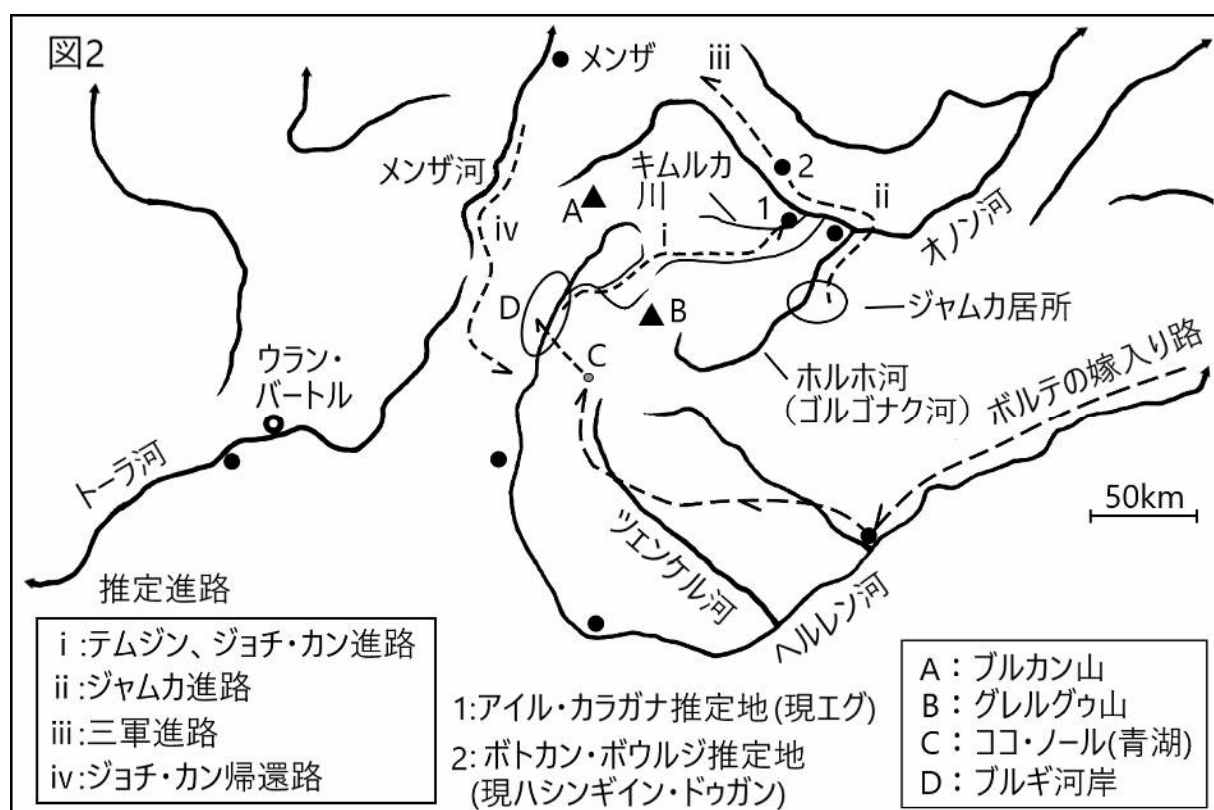
ホコルトゥ河原以下 4 つほどの地名はブルカン岳の後ろ (北) にある。オノン河添いと、メンザ河添いの両方を探す、それらしい地名は衛星画像にない。だが、元来た道を帰ったのなら細かく地名を挙げないだろうから、西北のメンザ河添いの地名と推定される。メルキト人がブルギ河岸にいたテムジン

一家を襲ったと考えられる経路である。恐らくメンザ河流域はメルキト部族の領域であり、モンゴル部民には馴染みが薄い土地だったので、地名を細かく述べているのだろう。メンザ河を遡り、トーラ河上流の少し東にある平地（48.15N108.08 付近）を経る路が推定される。この平地で巻き狩りをしたのではなかろうか。そこからヘルレン河方面へ抜ける道筋は幾本かある。以上を次図に示す。

5. 考察

5. 1 どこへ、何のために向かったか

ボトカン・ボウルジから先に進むとしたら、オノン河添いに北西方向に向かうだろう。そこからメルキトの中心部方面にはカラウンの隘路しか無く、現キャフタ方面までの距離は500kmもある。その上、道が狭く大人数では進めない。向かった地はメルキトの中心領域ではありえない。とすると、考えられる攻撃目標はその手前、図1の現在のロシア領のメンザ（Menza）集落のある場所であろう。ウキル（Ukyr）という集落もある。現在はロシア連邦の中のザバイカル地方という行政区分であるが、元はチタ州とアガ・ブリヤート自治管区であった。名の通り、モンゴル人と兄弟関係にあるブリヤート人の地域である。ということは、ここまでメルキト人の領域だったと考えられる。当然、彼らはヘルレン河上流域の地理にも精通していただろう。ここに居たメルキト人がテムジン一家を襲ってボルテを誘拐したのではなかろうか。復讐の為にこの集落を攻撃した事実があり、それが脚色されて秘史の記事になったと筆者は考える。



5. 2 テムジンを襲ったメルキト兵力

テムジン側の規模を考える前に、テムジン一家を襲ったメルキト人の人数の信頼性を考えてみたい。300人とあるが、攻撃対象はテムジン一家のみである。一家にいる成人男子はテムジンと次弟カサル、ベルグテイ、三男カチウンで、末弟テムゲは成人前と思われる。ジェルメが何歳位なのかは分らない。ボウルチュは

まだ部下ではなく友人であろうから、テムジン側に常に居たとも思えない。彼ら全てを戦力と考えても 7 人である。配下の部民は周りにはまだいないはずだ。このようなテムジン一家を 300 人も的人数で襲えば、テムジン側はたちまち包囲されて、一網打尽になる。テムジンやボルテが逃げ惑う状況から考えると、敵の人数は多く見積もってもテムジン方の 2 倍程度、15 人くらいではなかろうか。

5. 3 復讐の目的と兵力の推定

大戦力で襲って、そこに居るメルキト人に立ち直れないほどの打撃を与えると、折角返還交渉をしてくれたトオリル・カンのメンツを潰すことになる。メンザやウキル集落付近のメルキト人を追い散らし、劫掠するのが目的だったと思われる。用いた兵力は襲ってきたメルキト人の数倍程度、50 人ほどではなかろうか。

5. 4 いつ、このような軍事行動があったのか

ボルテ奪還後数年も経ってから行くと復讐の意味が薄れるので、奪還年の翌年、即ちテムジン、20 歳、1181 年に復讐戦が行われたと考える。

5. 5 テムジンの帰った先

辱めを雪いだテムジンは、ジャムカと共にゴルゴナク河原を目指したとある。これは、ブルギ河岸には帰らなかったことを意味しているのだろう。途中でジャムカとも別れ、父祖の居住地であったアイル・カラガナ付近に留まり、亡父の元に居た部民と共に新たな生活を始めたと思われる。先行したジョチ・カンが話を付けてくれていたはずだ。妻を奪われるという苦難を味わったが、その結果早く本領に戻れた、と言えなくもない。

5. 6 アイル・カラガナに向かう途中、タナ小河で滞留した理由

ブルギ河岸から旧領アイル・カラガナへ移動したのは、生活拠点を移すためだった。そのために、移動速度の遅い家畜を先に移動させておき、後続するジョチ・カンを先に通してから移動を再開したのだろう。到着が 3 日遅れたのも、家畜の移動に思ったより時間が掛かったからであろう。アイル・カラガナの地もメルキトに隣接してはいるが、牧地の規模がブルギ河岸よりも格段に広くて人が多い。メルキト人は好き勝手な行動ができないと思われる。

5. 7 トンゲリク河

この名は、他の神話時代に近いような節にも出てくる。本稿で扱った河との関連性については稿を改めて述べたい。

了

参考文献

- [1]: 安田公男『チンギス・カンの駆けた道』文芸社 2022 年
- [2]: 白石典之『モンゴル考古学概説』同成社 2022 年